

5. 回遊計画

行動のデザイン。

知らない街の路地裏を歩く、ちょっとウキウキとした気分を思い浮かべる。不揃いな面白さ。整理されない意外性。偶然は、色とりどりの発見を与えてくれる。

寄り道の楽しさも、それと似たところがある。

意識の底では、足を向けさせられていると知りつつ

そのようにしてみる、楽しみ。

回遊計画の位置づけ

1) 線から面へ

県都宮崎市の顔としての橋通をシンボライズさせるため、前項までは主として線で捉えたデザインの在り方を述べてきたが、人が集い賑わいのある街を目指すとき、橋通を中心にした回遊性の視点に立った面的な計画が重要になってくる。

2) 橋通の特性

現状の橋通は、商業機能としての連続性にかける。即ち1・2丁目および名店街の3商店街と三番街・中央商店街とは、恵美須通線（ワシントンホテル通）で分断されていることが来街者調査を見ても明らかであるし、地元の人々も実感している。

中央商店街は、山形屋や橋ジャスコを核に、一番街・若草通・寿屋と絡んだ回遊性がみられ三番街にも及んでいるが、一部の通り・地区に偏向していて、面的に一体となった回遊性には乏しい。

一方1・2丁目と名店街は、いろいろな街づくり事業から対象外にされていると言った不満も聞かれる位、商業機能の集積度は低く人の流れも少ない。（図-1）

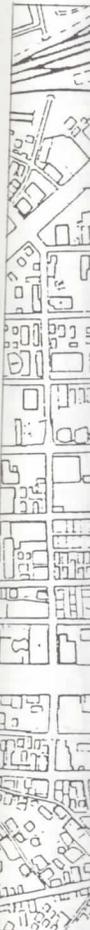
3) 面的展開の方向づけ

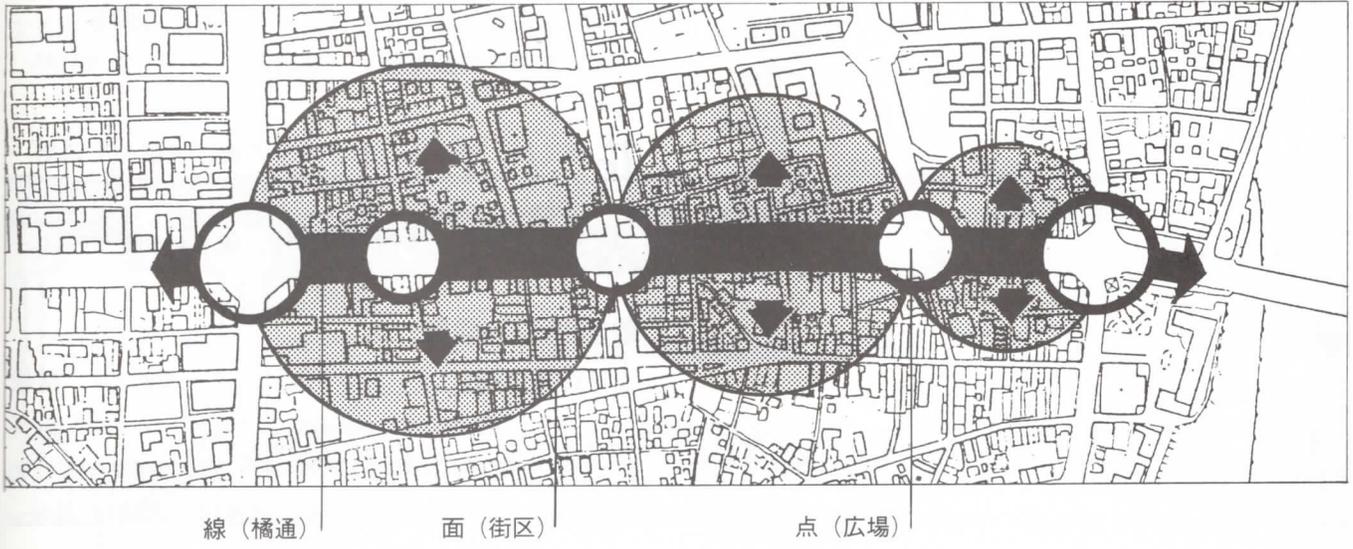
橋通は一つの意地を通し、3丁目側から1丁目側への客の流れを増大させるためには、橋通そのものの連続性のある魅力の創出に加え、ゾーニングをもとにした思い切った考えの面的な展開が望まれる。

中央商店街と三番街は、一番街・若草通をはじめ高千穂通や裏通りを含めた回遊性の高い歩行空間と独自性の高い商店街づくりをして、面的一体性を造りださなければならない。また、ナイトゾーンと関係した夜型展開を積極的に推進する必要もある。さらに、宮崎駅前開発地区への連続性をもたせるために、広島通の歩行空間の整備は不可欠である。（図-2）



● 図-1





● 図-2

